

城崎歴史



温泉寺 本尊十一面觀世音菩薩



変形四獸鏡 小見塚古墳出土



金銅装大刀部分・鈴など 二見谷1・4号墳



秋祭り（1）



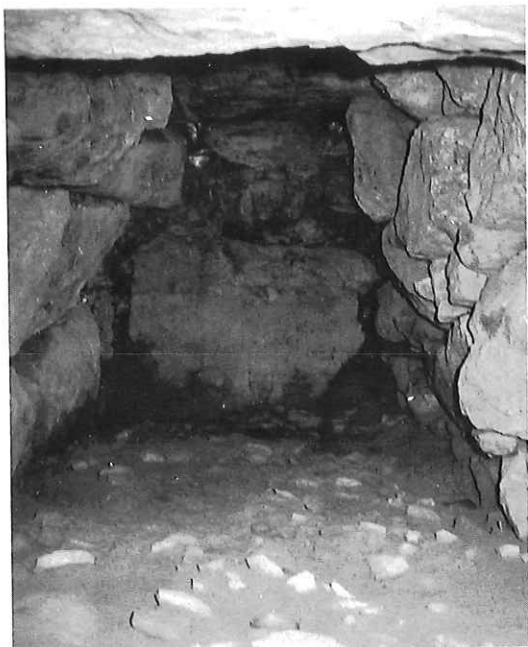
秋祭り（2）



むぎわら細工（1）



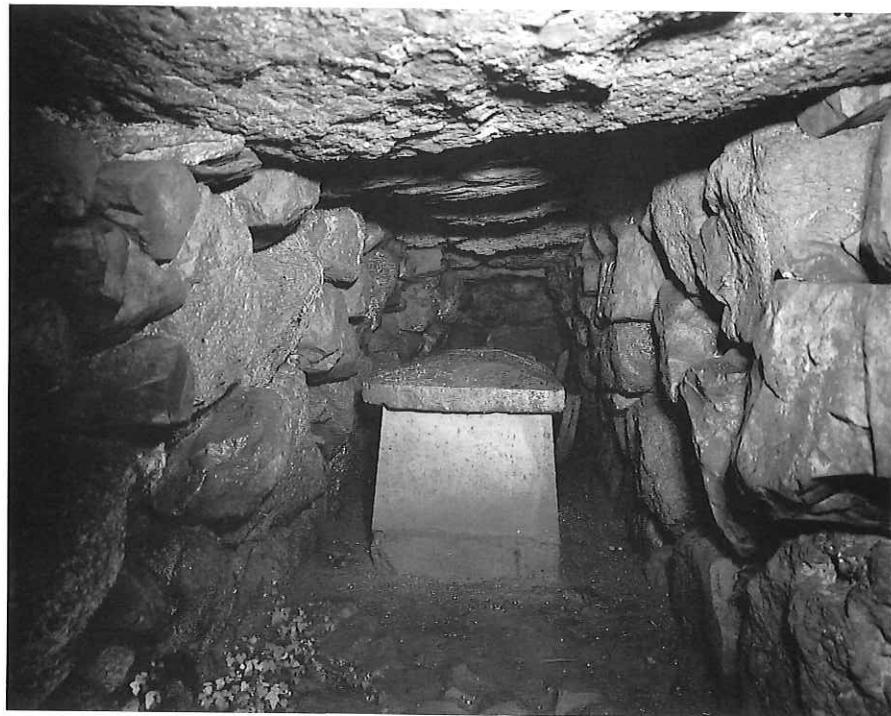
むぎわら細工（2）



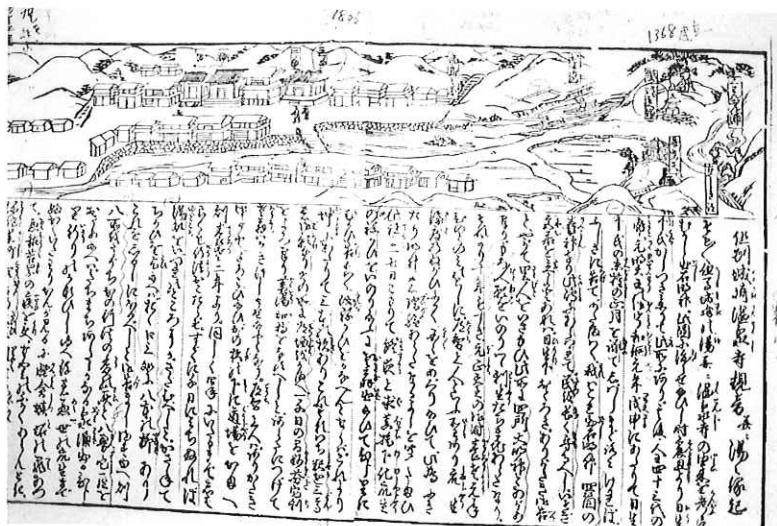
ケゴヤ古墳（石室全体）



ケゴヤ古墳出土の土器



二見谷古墳（4号墳）



温泉寺觀音並びに湯の縁起



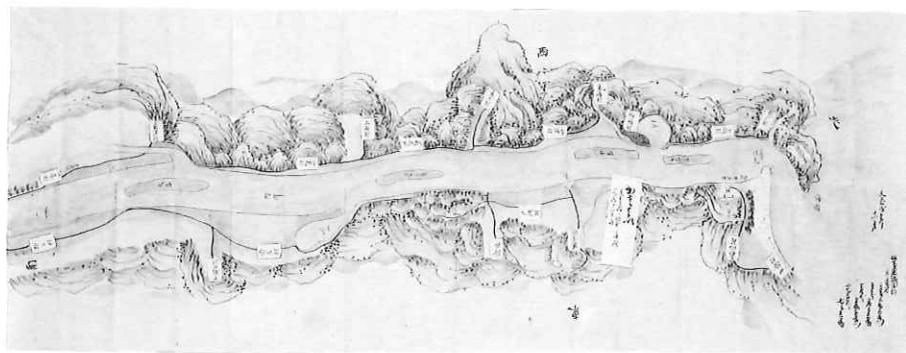
宝筐印塔（温泉寺）



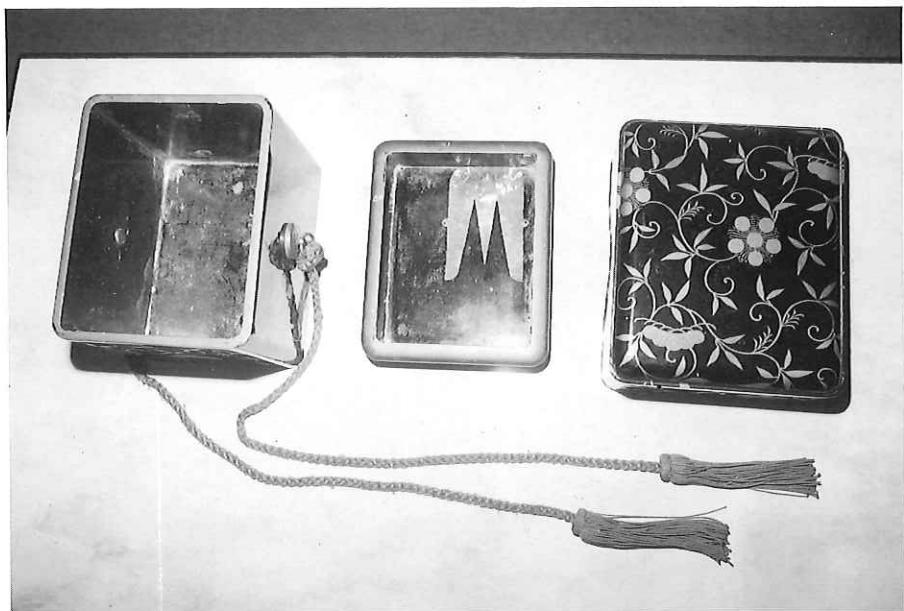
温泉寺



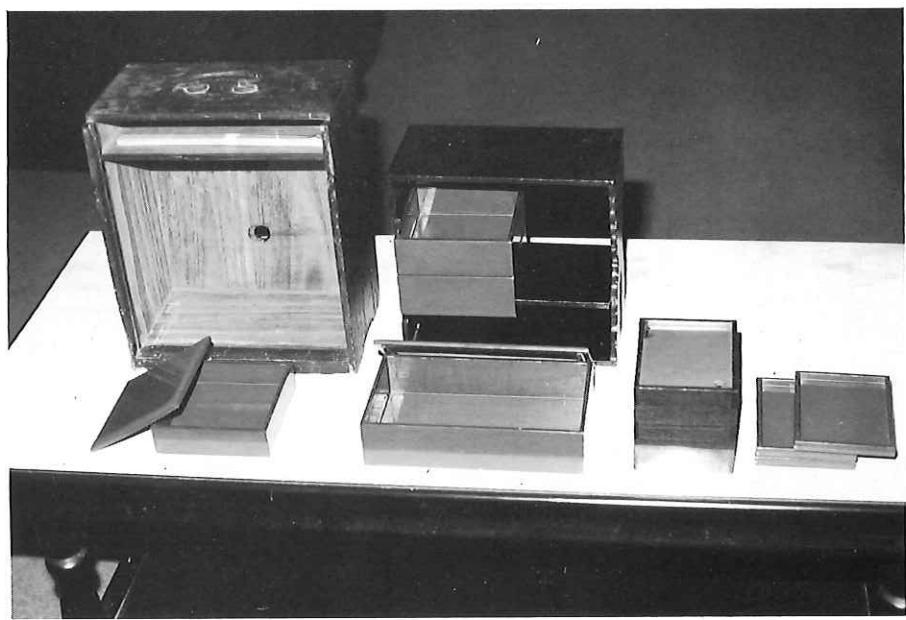
城崎郡五十ヶ村の庄屋による巡見使への歎願書古文書（瀬崎藤右衛門氏蔵）



楽々浦かざはや周辺全図（瀬崎藤右衛門氏蔵）



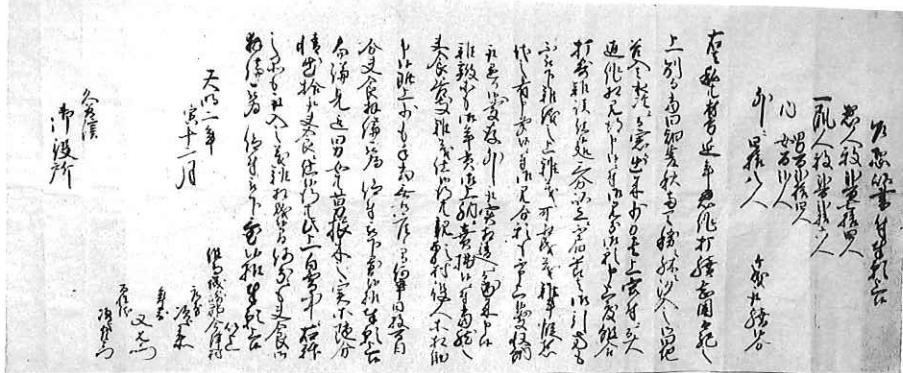
瀬崎藤右衛門家什器類（1）



瀬崎藤右衛門家什器類（2）



樂々浦舟小屋（苦屋）群



天明の飢餓歎願書（上崎茂氏蔵）



北但大地震（地蔵湯より城崎駅方面を望む）



盆踊り

天保八年

餓死人某
飢病人取綱書上情

四

五月

但馬玉博

卷之三

天保の飢饉（瀬崎藤右衛門氏蔵）

序

わがふるさとは、「山の手線の電車に跳飛ばされて怪我をした、其後養生に、一人で但馬の城崎温泉へ出掛けた」と志賀直哉先生の名作「城の崎にて」で紹介をされた城崎であります。

豊かな四圍の緑、悠々たる円山川、一四〇〇年の間湧きつづける温泉と和風の街並が一体となり、身も心も安らぎを覚える詩情豊かな町がわがふるさとであり、これはかけがえのない貴い財産であります。

この財産は歴史の発展とともに、永いきびしい時代をいきつづけて現在に至っておりますが、いずれも何も語りかけてはくれません。

われわれは「歴史と文学といで湯の町」を自負しておりますが、そのためには町の歴史を深く知るとともに正しい理解とその真意を充分くみとる必要があります。そうして二十一世紀への新しい時代へ前進するために、今日の町を築かれた先人の姿を学び、その偉業を明らかにし、これを稱揚し、なお現在を一層発展させて次の世代に伝える責務があります。

たまたま昭和六十年一月は新町発足三十周年の記念すべき年であり、その記念事業として前城崎町長西村六左衛門氏（十三代故人）が、城崎町史の発刊を思い立ち、昭和五十六年に着手されたのです。

さて、この城崎町史を刊行するにさいし、私は特に次の三つの事柄について、先輩の方々に敬意と謝意を表し、あわせてわが町の振興計画の指針として行きたいと考えております。

まず第一は震災復興のことです。

大正十四年五月二十三日午前十一時十分、北但地方を突如おそった大地震は、一朝にして湯の町城崎を全滅させ、多数の生命と莫大な財産を灰燼に帰したのであります。時の城崎町長西村佐兵衛氏（四代故人）は茫然自失する町民を叱咤激励し、廢墟の中より復興への新しい希望と力を喚起させ、自らもその陣頭に立つて町づくりの基礎を確立し、見事に立派な町に復興されたのであります。西村佐兵衛町長ならびに当時の方々に深甚なる感謝を申し上げます。又全国各地から寄せられました暖かいご援助も終生忘ることはできません。

当町の町づくりの基本は、公共施設の整備であり、浴場（外湯）を中心とした旅館、商店、住宅が形成されており、伝統を重んじる、共存共栄の精神に貫かれたものであります。

その第二は内湯訴訟問題の解決であります。

城崎温泉発展のために、温泉は外湯、内湯併置の基本方針を時の城崎町長西村六左衛門氏（十二代故人）と片岡眞一氏との間であらためて確認をされ、片岡氏の誠意ある全面的肯定により一挙に和解が成立しました。これは「温泉への感謝」と「温泉を守る」この郷土愛と共存共栄の精神が実を結んだのであり、片岡氏ならびに関係者の方々に心から感謝の意をささげるものであります。

ついで第三は町村合併のことであります。

当初、兵庫県から城崎町、港村、内川村の三ヶ町村の合併が適正なりと提案があり、その意を了として実現を期したのであります。が、港村が単独で豊岡市と合併いたしましたので、ここに城崎町と内川村の二町村が合併し「新城崎町」として発足したのであります。

時の城崎町長西村六左衛門氏（十二代故人）、内川村長瀬崎藤右衛門氏（六代）は、両町村の地勢的・歴史的な観点、立町の性格、ならびに住民感情を充分考慮し合併の基本条件として、将来を展望し「観光」と「農政」の二本柱による町政の振興に献身努力をされ、新町のいしづえを築かれたのであります。

その業績は誠に偉大なものでありこれの実現にご支援、ご協力された議会の方々、町民のみなさ

んに深く感謝を申し上げる次第でございます。

なお先年発刊されました内川村誌にも町村合併のことは記述されておりますが、このたび城崎町史の刊行にあたり、瀬崎村長が合併成就のためにそがれた限りない情熱と、自ら現城崎大橋の架橋を提唱し幾多の困難を克服して住民の宿願を見事に果された功績は高く評価されるものであります。そうしてこの大橋は地域産業経済の発展と文化の興隆に大きく貢献しておりその確信に充ちた達見と長年の努力は永劫に稱揚されるものであります。

いよいよ町史発刊の段階となりましたが、町史は歴史的変遷を明らかにするものであり、その刊行は言うべくして非常な大事業であります。

町は町史編さん委員会を設置し、当町のご出身であります、京都大学の上田正昭教授に町史の監修をご依頼し、ご快諾を得ました。このことは何よりも幸せなことでありました。

同時に編さん専門委員として、上田教授のお世話で、武庫川女子大学の安達五男教授、京都大学講師の伊藤之雄氏に、専門分野での広い視野と学識をもつて参画願うことができ、ここに格調高い城崎町史を発刊することが出来ました。誠に喜びにたえません。厚くお礼を申し上げます。

また執筆委員として、諸先生方に専門的分野をご担当願い、夫々偏見や思惑のない、貴重な文献

をまとめていただき完成することができましたことを大変よろこんでおります。長い年月にわたるご苦労に対し厚くお礼申し上げます。

当町は大正十四年の大震災により、過去の記録や史料が焼失しましたが、その中で貴重な史料をご提供たまわり、ご協力いただきました方々にも深甚なる感謝を申し上げます。

このようにして、多くのみなさんのご労苦とご助言、ご協力により城崎町史は発刊の運びとなりました。

本史はわが郷土先人の汗と涙の結晶であり教訓であります。末長くご愛読をお願い申し上げます。おわりに、監修者、専門委員、執筆委員、編さん委員の諸先生方、篤志家の方々、町民のみなさん、編さん事務局、町職員に謹んで厚く敬意と謝意を表する次第であります。

昭和六十三年三月

城崎町長 西村 悅六

監修のことば

“歴史と文学といで湯の町” 城崎の町史（本文編）がついに完成した。城崎町史の編纂について、町当局からご相談をうけたのは、昭和五十五年の冬であった。私が城崎に生まれ、幼少年期をいで湯の町ではぐくまれたのにちなんでの町史監修の依頼であった。城崎小学校卒業のころから歴史学へのこころざしを抱いていた私は、豊岡中学校へ進み、ついで京都府立第二中学校に転入学した。そして国学院大学・京都大学を経て現職にいたっている。歴史学の研究にいそしんでいることも、城崎町史の編纂にたずさわるえにしとなつた。市町村史の監修・編集にかんしては、八日市市史・向日市史・奈良の部落史・山城町史・篠村史などに関与したが、生まれ故郷の歴史と文化を改めて検討する機会を得たことは幸いであり、感慨もひとしおのものがある。

地域史の調査と執筆には、およそ三つのタイプがある。ひとつは専門の研究者のみによつて組織したありようであり、ふたつは郷土史の調査と研究をつづけられてきた方々のみによつて組織する方法である。城崎町史の場合はその三つ目の例であつて、若干の町外の専門研究者が参加して、そ

の主体はあくまでも郷土史の研究者におかれた。郷土のために郷土で郷土を研究する方々の多い城崎町にあつては、第三の編成が適当であると判断した。

町当局の推薦によつて、調査・執筆のメンバーが決定し、第一回の編纂委員会が開かれたのは、昭和五十六年の四月であつた。爾来調査と執筆に歳を重ねて、ここに本文編が発刊されることとなつた。各位のご労苦にたいして深謝する。

城崎町の歴史と文化はさかのぼつて古い。但馬の縄文時代人の生活は、関宮町家野遺跡や日高町神鍋遺跡・豊岡市中谷貝塚などにもうかがわれるが、城崎町にあつても、上山出土の縄文土器片あるいは上山字スクモ塚の調査成果にたしかめられるよう、それらには縄文時代・弥生時代における人々の暮らしの推移がみいだされる。とりわけ豊岡市氣比出土の四個の銅鐸の存在は注目すべきであろう。城崎町の古墳時代も軽視できない。小見塚古墳・稻荷裏山古墳・樂々浦古墳群・二見谷古墳群などをはじめとして数多くの古墳が分布する。なかにも但馬で最大級といわれる大神塚古墳、金箔が多数検出されたケゴヤ古墳などは特筆にあたいする。

城崎の地名は平城宮出土の木簡などによつて、遅くとも奈良時代に実在したことが判明するが、『和名類聚抄』にも城崎郷が登場する。城崎の地域は、"但馬の湯"の所在として早くから著名で

あつた。『古今和歌集』に収録する藤原兼輔“ふたみの浦”的詠も、但馬の湯へおもむいたおりの歌であつた。

中世における城崎町域の郷村の歴史と文化にも、「太田文」にみいだされる城崎の様相あるいは桃嶋浦の漁業権など、みのがせない地域の内実化がほうふつとするが、貴族や歌人の入湯にもありし日の“いで湯”的面影がしのばれる。城崎の近世は多彩であった。円山川の水運と湯嶋舟、城崎温泉の繁栄と旅館の発展、温泉寺をはじめとする社寺文化と民俗文化のひろがりなど、近世の地域史に独自の光華を結実する。このたびの町史編纂にともなう史料の採訪とその調査で、膨大な量の近世史料が蒐集された。それらの成果は、本文編につづいて刊行予定の史料集に集約されている。

明治二十一年（一八八八）四月の市町村制の公布にともなって、翌年の四月には旧湯島村・桃島村・今津村が合併して湯島村が誕生した。明治二十八年（一八九五）三月湯島村は城崎町となり、昭和三十年二月には、内川村と城崎町が合併して、新城崎町の発足をみた。近・現代の城崎の歴程は激動にとみ、その軌跡には湯島村・内川村の祖先の歩みが躍動する。北但大震災と町村の壊滅、そのなかでとりくまれた血と汗のにじむ復興事業、戦後改革と町村の展開、城崎町活性化の方途など、そこには枚挙にいとまもない重要事項があつた。内川村の農地改革、城崎町の総合計画、大谿川

河川浄化工事、そのひとつひとつに城崎町の現状が連動する。近・現代においても新史料が発掘・提供されて、城崎町の近・現代史はより鮮明に浮かびあがつた。城崎町にあつては温泉の集中管理と内湯問題の解決は、不可欠の課題であつた。そして城崎のだんじり祭などは、城崎の伝統を象徴する風物詩であり、生きた絵巻であつた。これらはとくに付編として記載することとした。

歴史と文化を熟知することは、現在と未来を照射する展望へつながる。本書が明日の城崎町のあらたな町づくりに大きく寄与することを願つてやまない。町史の編纂、調査と執筆にご尽力いたいたい委員の各位、そして事務局・町職員、また史料の閲覧や提供にご協力いただいた方々にあつく感謝する。

昭和六十二年十月三日

京都大学教授 文学博士

上田 正昭

凡例

一、本巻は『城崎町史』の本文編として、城崎町の自然および歴史と文化を中心に、原始・古代から近・現代までを編集・叙述した。

一、記述には原則として当用漢字・現代かなづかいを用いた。

一、固有名詞・歴史用語など難解なものには、適宜振り仮名を付けた。ただし幾とおりもの読み方が可能なものについては、そのうちの一つを示したが、他の読み方を排するわけではない。

一、日本年号の下に（）をもつて西暦年を記した。

一、執筆にあたっては最近の研究成果を参考し、また引用史料は原則として二字下げとした。

一、文中の図・表・写真については、それぞれにそくして一連番号を付け、巻末にその一覧を収録した。

一、本巻の執筆分担は巻末に掲げたとおりである。

序章 城崎の自然環境

第一節 歴史と文学といで湯の町

3
いで湯と城崎町の位置

第二節 城崎町とその周辺の地質

6
但馬国の湯と城崎

五回の火山活動と地質

13
再度の火山活動

第三回目から第五回目

6
城崎断層群

第三節 城崎町とその周辺の地形

概観　円山川　谷底平野および氾濫原上位面

山麓緩斜面

氾濫原下位面および洲

洲の形成とその開発

第四節 城崎町の気候

気候　北但地域の季節　城崎に残る気象用語

第一章 原始・古代の城崎

第一節 町内の遺跡とその分布

開発事業と遺跡 保存と研究 桃島・今津の遺跡 上山の遺跡

楽々浦周辺と飯谷の遺跡

第二節 採集から米作りの時代へ

土器以前	土器と弓の発明	土器の編年	縄文人のイエ	資料の宝庫貝塚
動物性と植物性の食料	沈線で飾った土器	糸痕のある土器	氣比の銅鐸	
大阪で作られた三号鐸	銅鐸の意味と絵画	戦いの住居	石の道具と鉄製品	
スクモ塚の石の斧				

第三節 小見塚古墳とその時代

集団墓・台状墓と古墳 小見塚古墳の発見 粘土で巻いた棺 塙輪の使用

同型の銅鏡 竜文の銅鏡 石を利用した棺 町内の古墳密集地 町内唯一の古墳

第四節 二見谷古墳群

横穴式石室の登場 二見谷古墳群 ケゴヤ古墳の調査 金箔の発見 死者の食事
追葬・追善と再利用

第五節 織内政権と但馬

アメノヒボコ伝承

加陽の地名と石枕

織内政権との関連

海の古墳・川の古墳

古墳と式内社

古代氏族の分布

ミヤケとアガタ

第六節 奈良時代の城崎

城崎の地名

城崎郡の成立

郡衙の所在地

律令制と民衆生活

都で死亡した兵士

役人の家と生活

買われた奴婢

脱走する奴婢

第七節 温泉の発祥

温泉信仰

有馬と城崎

温泉発見伝説

鴻の湯伝説

まんだら湯の起源

第八節 平安貴人の来遊

古今集と藤原兼輔

大中臣能宣と結の浦

壬生忠見とその知人

第二章 中世の城崎

第一節 太田文と莊園

鎌倉幕府の成立 中世の莊園 但馬守護としての太田氏 但馬国太田文

太田文にみる城崎 桃嶋浦の漁業権

第二節 寿永の内乱と承久・元弘の変

平氏知行国但馬 越中次郎兵衛盛継 近流地但馬 雅成親王と恒良親王

第三節 山名氏の興亡

南北朝の分立と但馬の戦乱 山名氏と但馬 明徳・嘉吉の乱 応仁・文明の乱

織田と毛利の角逐 秀吉の但馬征討

第四節 貴族歌人の入湯

藤原知家と藤原範基 西園寺実雄 増鏡と安嘉門院 兼好法師と頼阿法師 宗祇法師

鷹司忠冬と飛鳥井雅教

138

130

123

109

第三章 近世の城崎

第一節 幕藩体制の確立と城崎

(1) 湯島の呼び名

湯島 呼び名の由来 中世の村の姿 近世の村と検地 湯嶋の「ムラ」のおこり

(2) 杉原氏三代の治世

杉原氏 初代杉原長房 二代杉原帶刀重玄

(3) 極楽寺と沢庵

極楽寺 極楽寺のみどころ 金地院崇伝 沢庵と湯嶋の坐湯

(4) 宗門改めと檀家制度

島原の乱 檀那寺 寺請制度

(5) 本住寺・蓮成寺の移転と湯嶋村の成立

本住寺の縁起 蓮成寺の由来

第二節 元禄時代と城崎

(1) 京極藩の治世

豊岡藩主 豊岡京極藩の減地 元禄時代 開山忌

182 182

172

164

159

154

147

147

(2)	新田開発					
	町人の新田開発	農具と肥料	田舟	桃山の碑	菊屋島離農の碑	
(3)	温泉寺の縁起帖					
	温泉寺	湯杓の由来	温泉寺觀音並びに湯之縁起	開山、道智法師墓碑		
(4)	「銭」の流通と服装					
	宋錢・明錢	元禄の改鑄と天保錢	藩札の発行と札場	湯嶋の引換会所		
	一文錢	「百相場」の經濟	祭りと団七のよそおい			
(1)	円山川の舟運と湯嶋舟					
	円山川の舟運	角倉了以	河村瑞賢	北前船	円山川、内陸水運の便	薪廻船
(2)	湯嶋舟					
	湯嶋舟と道中案内	問屋制度と通しかご	舟賃	つづら冊子 <small>ぶみ</small>	三門跡の来湯と川舟	
(3)	納屋					
	寄宮					
(4)	大谿川と「イト番」					
	大谿川と湯嶋舟	地誌に見る舟の数				
(5)	江戸時代の道					

豊岡街道湯嶋みち　久美浜街道　竹野街道（因州街道）

津居山方面と犬みち

伊賀谷の峠・その他

(6)

今津渡し

円山川下流の渡し

今津渡し　今津渡船関係書類

「今津渡し」を利用した出石藩

風と帆と舟　今津渡しの思い出

今津渡し

第四節

享保時代と城崎

享保の改革と定免制

(1) 改革の要点　定免制の実施

(2) 城崎温泉の繁栄

温泉寺縁起図　因州半七と富田仙助

桃源水の銘

(3) 後藤良山と香川修庵

後藤良山　香川修庵　「海内第一泉」　「海内第一泉」のいしぶみ

(4) 山論と地論

山林原野の利用　入会山　今津村と戸嶋村の争論

「今津」は出村か分村か

樂々浦入江の網場の争論

第五節

文化文政の時代

(1) 城崎にかんする刊行物など

(江戸文化の最盛期)	化政期とその後	化政期以前のもの
「おかげまいり」と「巡礼」	おかげまいりと巡礼	六十六部
稻荷信仰 伊勢まいり 伊勢講	おかげまいりと巡礼	320
四国山八十八カ所巡り——(お大師山)——	札所石 奥の院「大師堂」	330
(3) 巡礼のみち 石仏の信仰 極楽寺の仁州と温泉寺の実音	札所石 奥の院「大師堂」	330
中性院・福聖院 いしぶみ「繁徳維昭」	札所石 奥の院「大師堂」	330
(4) 民間信仰と石造遺物	札所石 奥の院「大師堂」	330
地蔵信仰 六地蔵 万靈供養塔 名号石と五輪塔	札所石 奥の院「大師堂」	330
町石・道しるべ	宝筐印塔と供養碑 墓石	347
(柴野栗山と水明楼)		
三本松の風致 残夜水明楼跡 扁背記		
(6) 伊能忠敬の但馬測量		
伊能忠敬と大津屋七右衛門 今津村測量役人		
(7) 城崎八景		
湯嶋名所 日本人の風景論		
(8) 天明・天保の大飢饉		
今津村文書 天明の飢饉 天保の飢饉 湯嶋村 井筒屋墓地・武谷豊の墓碑	385 378 373 364	347 330 320

久美浜代官所通達と余話

第六節

幕末と城崎

(1) 天領百姓

代官 湯嶋陣屋

代官の職務

米納と銀納

湯嶋の刃傷事件

小物成と定免・検見

久美浜代官所 村方三役と五人組

指出明細帳

安政の灾害

百載不朽碑

会式の次第

(2) 但馬海岸の防備

(3) 黒船来る 代官の巡見

生野の変と城崎

農兵組織 世直し一揆 生野の変と池田草庵

美玉三平と平野國臣

生野の変と顛末

南八郎・大江甚助・多田弥太郎 生野代官所

朝倉心斎と鰐江傳左衛門

(4) 桂小五郎の潜行

桂小五郎と城崎

(5) 池田屋事件 私塾と寺子屋の発達

藩校と私塾 寺子屋の発達

藤金吾

(1) 道と旅と宿
旅館の成立と成長

458 458

452 447 436 429

399 399

第七節

道と旅と宿

19

道と旅 やどや、旅籠の専業化

(2) 旅籠から旅館へ

宿場と旅籠 但馬・湯嶋みち

(3) 湯嶋の発展と旅館

ゆしまの旦那衆 専業旅館

(4) 「筑紫紀行」と井筒屋六郎兵衛

道中記 筑紫紀行 井筒屋六郎兵衛

入込湯・幕湯・切幕

(5) 三井静の入湯と大津屋七右衛門

御用商人と三井家 入湯の「定」

(6) 旅館制度の変遷

「やど」の問題 中世における貴人の宿所 宿坊 温泉番付見立表と源泉

第四章 近代の城崎

第一節 明治維新と城崎

- (1) 廃藩置県と地租改正 493
- (2) 維新直後の城崎 行政区画の変化 493
- (3) 自由民権運動の展開 豊岡県の地租改正 504
- (4) 但馬における民権熱 民権運動と城崎 504
- (5) 学制公布と小学校開設 松方財政と民権運動 512
- 学制公布と豊岡県の対応 湯島校の創業時代 篠磯校と楽々浦校の開設 512
- 創業期の教育状況
- 明治中期の学校教育
- 学制から教育令へ 洋風校舎の新築 小学校令と簡易小学校 高等科の設置 520
- きびしい試験制度と品行簿 授業料と就学出席状況
- 文明開化と地域の変容
- 排仏毀釈と新しい公共機関 町の概況と浴場 交通機開と文明の利器 觀光娯楽施設 538
- 水明楼の衰亡 来遊した著名人 当町出身の二人の画家

第二節

城崎町の近代化

(1) 城崎町・内川村の発足

地価修正要求と大同団結運動　国会開設への準備　民力休養　地域開発促進

播但鉄道と但馬鉄道　播但鉄道延長の許可　日清戦後の城崎温泉　温泉改良構想

日露戦後の政治と社会

(2) 産業経済の発達

明治初期城崎の産業構造　国 の 農 政　農事指導組織の変遷　農業技術の進歩

村内地主と村外地主　城崎の産物　養蚕の盛衰　城崎の漁業　金融の近代化

日清・日露戦争と国家主義教育

皇国思想と学校儀式　日清戦争と軍国教育　日露戦争勃発　陸軍療養所の開設

戦勝祝賀と戦死者公葬　戦争後の教育と韓国皇太子来湯

学校教育の近代化と社会教育

就学率の向上と義務教育の確立　校舎の増築・新築　学校行事の始まり

試験制度の廃止と教育内容の近代化　補習教育と社会教育の発足　同窓会の結成と活動

三人の同窓生

鉄道の開通と町の近代化

陸軍療養所開設と町の活況　鉄道の開通と電燈・電話の架設　浴場の改築と旅館の近代化

633

618

602

580

553

553

地域環境の整備と余話二つ

第三節

大正の好況期と北但震災

(1) 第一次大戦と町勢の発展
町の近代化の進展

(2) 大正デモクラシーと城崎町
城崎町立憲青年団

(3) 内川村の農業
農機具の進歩 肥料の発達 指導体制の整備
教育の進歩と補習教育
中等学校進学熱の向上 新教育思想の導入と反動 学校スポーツの発達と水泳
幼稚園の設置と楽々浦校の新築 大正期の社会教育
学者文人の来遊と作品

行政当局の対応

城崎町と政友会
デモクラシーの浸透 震災と復興、赤誠会
但馬青年学生連盟

(4) (5) (6)

農機具の進歩 肥料の発達 指導体制の整備
教育の進歩と補習教育
中等学校進学熱の向上 新教育思想の導入と反動 学校スポーツの発達と水泳
幼稚園の設置と楽々浦校の新築 大正期の社会教育
学者文人の来遊と作品

内川村の農業
農機具の進歩 肥料の発達 指導体制の整備
教育の進歩と補習教育
中等学校進学熱の向上 新教育思想の導入と反動 学校スポーツの発達と水泳
幼稚園の設置と楽々浦校の新築 大正期の社会教育
学者文人の来遊と作品

北但震災と町の壊滅
志賀直哉と城崎
鉄道開通前後に訪れた人々
大正初期に来遊した人々
大正後期に来遊した人々

地震の発生と震災の状況 災害に対する救援

第四節

(1) 震災復興と戦時体制	震災復興事業	西村町長の復興路線	区画整理の実施	復興資金と憲政会
(2) 学校統合と鉄筋校舎	学校の被害状況	授業再開の経過	城崎・内川学校統合の経緯	
(3) 農業恐慌	珍しい鉄筋校舎の建設			
(4) 米とマユ	農産物価格の低落	農家経済の実情	時局匡救事業	
不況と内湯問題	西村町長の辞任	片岡町政	内湯反対派の町政	
(5) 内湯問題の発生	昭和十一年の町民大会			
(6) 昭和恐慌への対応				
浴客誘致の試み	城崎温泉発展構想	電燈料金値下げ運動		
復興後來遊した文人				
(7) 島崎藤村と与謝野夫妻	吉井勇その他の文人	戦後に作品を残した人々		
戦時体制の進展				
非常時と呼ばれた時代	満州事変の勃発	準戦時へ	新体制運動	

(8)

太平洋戦争下の城崎

戦時下の学校教育

青年学校の発足

青年学校の統合充実

郷土教育から国家主義教育へ

戦争の拡大と軍国教育

国民学校と皇国民錬成

戦争の激化と学校の種々相
 ^対

第五章 現代の城崎

第一節 戦後改革と町村の変貌

(1) 温泉都市の復興と町村合併
敗戦と大豊岡市構想 温泉地域城崎の復旧
城崎町・内川村の合併 豊岡市との合併問題

(2) 農地改革と農家の生活
第一次農地改革 第二次農地改革 農民組合
城崎町の農地改革 内川村の農地改革

農家の生活

(3) 新教育制度の発足
戦時教育体制の解体 新学制と城崎小学校 城崎中学校の発足と校舎建設

定時制城崎分校の開設と閉校 教育委員会の発足

町の民主化と文化運動

(4) 青年団の結成 「隠匿物資」問題 城崎同人クラブ 労働運動の発展
新生婦人会の発足 改編後の青年団 野球クラブと演劇研究会 公民館の発足

第二節 高度成長と観光事業

高度成長と町勢の振興

			振興計画の策定	城崎町環境保全基本条例の制定	町営ガス事業の供給開始
(2)	住宅の団地化	上水道拡張事業	結和橋の完成	城崎町商工会の発足	
	広域行政の推進	暴力追放と住民運動	城崎町消防本部の設置		
	テレビ・ラジオ・電話の発達	公共施設の整備	教育施設の整備		
(2)	観光事業の発展				
	城崎温泉と観光列車	飯谷峠道路の開通	温泉寺ロープウェーの完成		
	山陰海岸国立公園指定	温泉寺本堂の解体修理と美術館の建設	観光農業施設の整備		
(3)	社会教育の拡充発展				
	合併後の公民館活動	社会体育の振興	公民館の建設と社会教育の躍進		
	同和教育と青少年育成	文学遺産の顕彰	町民の文学活動	文化財の保護	
	玄武洞と舟小屋				
	第三節 町の現況と課題				
(1)	農業の機械化と水田再編				
	農林業基盤と自然的条件	農業の兼業化と機械化	水田利用再編対策		
	農林業の基盤整備	集落段階の総合振興計画			
(2)	風水害と治水対策				
	円山川の概要	伊勢湾台風の災害	第二室戸台風の被害	円山川の改修事業	
	937	925	925	899	891

改修計画と城崎町の現状

(3) 公共事業と福祉対策

951

城崎町総合計画の策定　公共下水道事業の推進　大谷川河川浄化工事の完成

生活環境の整備　福祉諸施策の拡充　人口動態と町の現状と課題

事務処理、施設の広域化　城崎中学校屋内運動場の建設

(4) 観光不況とその対策

観光施策の推進　不況対策協議会の提言　来日山開発（森林公園）

歴史と伝統を生かした街づくり　城崎温泉活性化への道　兵庫県立城崎大会議館の建設

今後の課題

972

付編 第一章 城崎温泉の集中管理と内湯問題の解決

第一節 城崎温泉の管理経過と現況

(1) 城崎温泉の管理経過

昔日の城崎温泉の管理 江戸時代諸国温泉番付

城崎温泉古事にかんする座談会

(2) 温泉管理と湯島財産区

湯島財産区の設置経過と温泉管理

湯島財産区の機構

議会設置 議会の構成

湯島財産区の現況 湯島区養老会

(3) 城崎温泉の現況

城崎温泉の概況 地質と源泉状況 外湯の概況

外湯の入浴料金と入浴者状況

温泉使用料金と温泉供給宿泊施設

第二節 城崎温泉の集中管理

(1) 温泉の集中管理

温泉集中管理の意義 集中管理の効果 温泉の価値評価基準

(2) 内湯紛争の和解と調停

北但大震災の復興と内湯訴訟事件 紛争の和解と調停

城崎温泉利用条例



(4)

(5)

集中管理達成の広報

印刷物の発行 講演と機関誌

温泉保護と城崎温泉今後の課題
汲み上げ規制と温泉保護審議会

温泉開発審議会

城崎温泉の今後の課題

1098

1095

第一章 城崎だんじり祭

第一節 祭りの意義	1105
神人一体感　四所神社の由緒	
第二節 氏子総代	1108
神仏混合禁止令　秋祭りと氏子総代	
第三節 ふるさとの心と祭り	1112
夏まつり　心をつなぐふるさと意識　ハレの日	
第四節 秋のだんじり祭	1115
歴史を訪ねて　だんじりの字義　だんじり太鼓　だんじりを動かす人の組織	
だんじり祭りの順序、次第　だんじりの構造　御幣納め　御幣ふり	
第五節 祭りの伝統と時代の調和	1115
市街の膨張と上・下　階級組織と氏子制度	
第六節 余録	1154
御幣さばき　若衆の正服は団七　湯の祈禱と巡幸　弁天さんの御旅所　小だんじり	1157

第三章 伝統工芸 麦わら細工

第一節 麦わら細工の起源	1165
創始者因州半七 初期の作品 半七の顕彰	1168
第二節 明治前期（技術の進歩）	1170
民芸品から工芸品へ 技術の高度化	1171
第三節 明治後期（最盛期黄金時代）	1172
名工輩出と海外進出 用具と染料の進歩	1174
第四節 大正期（活況期）	
大正初期の活況 北但震災による壊滅	
第五節 昭和前期の状況	
復興への努力 麦わら細工に対する評価	
第六節 戦後の概況と今後の課題	
終戦直後の状況 麦わら細工振興への取り組み 実演天覧と顕彰 将来への展望	

あとがき

城崎町史略年表

城崎町史編さん執筆委員会名簿及び執筆分担一覧

城崎町史編さん委員会・専門委員・担当事務局名簿

史料提供などご協力者名簿

1211 1210 1208 1187 1185

付録

城崎町歴代町長・旧内川村歴代村長名簿（明治二十二年より）	1
町三役・教育長・議會議長名簿（昭和三十年より）	3
城崎町議会議員名簿（昭和三十年より）	4
図・表・写真一覧	6
文政五年湯嶋村大絵図	別添